

内山真乘房亮恵の事績について

研究生 増山 賢俊

平安時代後期（院政期）から鎌倉時代初期の真言宗関係寺院で活躍した人物の事績の解明を通して、院政期から鎌倉時代初期の真言宗の一端を明らかにすることを目的とし、醍醐寺・興福寺に接点を持ち、興福寺大乘院の末寺であった内山永久寺に関わる真乘房亮恵（一〇九八～一一七三）を取り上げた。亮恵は朗澄にも授法しており、そのような面から、人的繋がりにについても検討する。

亮恵が止住した興福寺末永久寺は奈良県天理市にかつて存在した大寺院である。明治に入り、廃寺となって記録が散逸した。このことを含めて亮恵に関する記録は充分でなく、その事績は不明な点が多い。

亮恵は、もと元興寺の法相宗僧で、金剛王院流祖三密房阿闍梨聖賢に真言密教を受法し、天承元（一一三一）年に三十四歳で灌頂を受法している。四十五歳の時、東小田原随願寺（興福寺末）にて淳寛より灌頂を重受し、一一五八年～一一六三年にかけて主に醍醐寺にて、朗澄や興然に授法した記録が見られ、長寛二（一一六四）年、六十七歳の時、醍醐寺十一口阿闍梨に補任されている。長寛二年頃より永久寺堂塔修理を行っていた事が残された解文から確認できる。承安元（一一七一）年、七十四歳で慈信に灌頂を受け、同年、興福寺相応院の鎮壇を行って以後、永久寺以外での活動記録はほとんど見当たらない。文治二（一一一八

六）年五月二十八日に八十九歳での入滅とする説もあるが、養和・寿永年説もあり、確定できていない。

記録に残る亮恵の主な活動期間は一一三一年～一一七三年であり、前後の年代についてはあまり記録が残っていないが、亮恵は金剛王院流を受法し、勸修寺僧とも積極的に関わっていた事が分かる。一一六四年以前は永久寺での記録がほとんどないことから、醍醐寺なども活動拠点にしていた可能性も考えられる。永久寺で活躍する側面が強調されるが、客阿闍梨との記述もあるなど、外部から頼実に呼ばれた僧としての側面が強いのではないだろうか。

付法の弟子に慈信、朗澄、蓮恵（任玄）、慈源（玄）、覚心、教恵、円海、興然の名が見られ、確定的ではないが、行慈も含まれる可能性がある。聖賢付法の済助、隆基、隆俊も亮恵と共に永久寺の僧であり、亮恵と密接な関係があったと考えられる。

南都諸寺と真言宗との関係も視野に入れ、亮恵の事績を見てきたが、亮恵は尋範が始修した永久寺における慈恩講に出仕するなど、興福寺法相宗との関わりもみられる。永久寺本願頼実も法相・真言宗兼学僧であり、亮恵の随願寺や興福寺相応院における活動などを考慮すれば、亮恵は興福寺における多くの真言宗修学僧の一人であった可能性もあろう。先に見てきた朗澄、淳寛等、亮恵周辺の学僧は興福寺・醍醐寺・勸修寺と関係を持つ。これらの寺家相互の関係と、真言宗相承の実態を調べることで、亮恵と興福寺の関係についても明らかにできるのではないか。